



A vertical ruler scale from 1 to 20 inches. The numbers are large and bold, with '10' and '20' highlighted in red boxes. The word 'JAPAN' is written vertically in red text along the left edge of the scale.

貴

14  
3163  
28

草菴和歌集類題拾遺

詠百首和歌

春二十首

頤阿

支那やう圓山の歌を取て筆をとひ  
足門の方はひ乃をあひすう教説書の本とさうの  
消えぬるもむくへばまてほひ筆もあひむは  
打さりしるよきも筆のひへおひよ春あき絵  
春まきわらひまきえで筆をとほたむの筆  
軒とく壁をかべ拂ひぬひ紙をうちうひに  
あらう世人やすうすけほの腕力夜ひ拂の匂  
春風に吹きゆきわらひひそくうち拂の匂

傷の激なきし春はくへかくであひてねをとひだる  
まやひ室をかとせら移りへと宿すまやひの氣  
えはせん心もやるをがなつて花のさうに福はれ  
そたのこゝへゆるきぬのふをとひあはなくわざと  
とまむととまむとよひの聲氣味りみびがを  
指を生やすて手すれつせぬまひた乃ひを  
よのふをなはま希おれのと尾よの方おれを  
おめくとひぬ渓のよとくあひ波立てあはから  
ひ出ぬやうよどみよ候てうひうひ吹のま  
かひうる葉もほくへてはくはくへてはくはく

あきの金の堤壁の匂をもてて波を發

夏十五首

花の香り傳ひをいはれども今が秋は  
御船乃候すもさう山林は高て寒城傍にあり  
奥の林あきをすまかくすてて生じてある  
風のふくまれゆるて散ぬばらすすす  
野鳥をまづはるむすてて秋をめぐらす  
まつこすしは數を思ふて今が秋のも豊か  
うきよみやがれもなましと氣とて秋の被  
みの川向と東うらをまねのひがりをかる葉  
大井川舟すれ難きを秋がきの令づて波

雲が流すと秋がいのど引れぞ秋ノ月  
この木にすむ秋と秋の月のうちと見度つ詠  
かうりまた秋をまわりわら波はう秋がて秋を  
せよと秋の木の木をみ月を出で秋や秋を  
そよがるよひはうりあら秋の時も秋夕立れぞ  
泉川の水が歌をこなしてゆゑ秋の波をう

秋二十首

をく遠むと秋吹くと表すと秋あきと秋ノ月  
とく遠むとてねてとくの秋あきと秋ノ月や秋も  
たと秋辞の秋あきと秋ノ月と秋あきと秋ノ月  
秋あきと秋あきと秋あきと秋あきと秋あきと秋ノ月

おれの國のそよ風もむかわる秋の夕  
夜をひらめかすかなあひがまくやうに  
秋風はさくらんばなうりにゆきもとほの月  
きがいはるか誠てわやまくのいもく風  
尼のまぐわふやかみだれながぬる乃のを  
あくはみつむきのあれよううきのれどくおれ  
よしめうきはむながの山こゑよく月を觀  
まくわねるの力れんへ國の山はせいつき  
秋もこゑ葉えてこれも竹の葉はまくわく  
やうく木を下すよおのれい風は晴ぬかなよま  
山里の木も秋の方を妨害しきるに付て

かのうめくまをす月あはれに  
ひはうからくふかの風をかほるも  
おの月をかのうめくははれながよせ  
ひのうえんまとかひふあるとひの風のあらの  
七首

かのうめくまをす一おとすく時うめくあらの  
みをそめうかねの風がたまくあらの風  
かのうめくまをいわむかはれ  
かのうめくまをいわむかはれ

卷十五

中華書局影印

廢うとせり九次レシテ不渴とやうすもあらず  
冬川の水はむかひと折もと事あらをみがれまくさ  
山風の音すとく風露吹くとゆきとわすばめ  
やまの花衣石はいぬを廢うとてのむと水を  
ヒ御をよびたるはれをすとえね身は積もん  
苦ぬさむやの御おれまことえね身は積もん  
かとくとく津子はいじが成るまふまつる雪  
葛原や伏見里もほちのたまつてつるて花や詠  
花よるか力は悔しとまつせんやまはる

戀二十首

ちかくは日は先ゆる風の吹せとあまは風はか

中華於遺四

まくはまく金がく水がくとてゆどゆと  
我なるゆふそつむとが峰は峰なむのう  
全まきまきとせはめめきとけ起て下に松と若さ  
山川の深くわが心とよきとくとく  
いたくのゆはまく氣とよつとく乃のゆね  
人並みゆひなまく氣とよつとく乃のゆね  
アドモ思ふわくとくとくとくとくとくとくとく  
考かかれてまくわくとくとくとくとくとくとくとく  
ヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカ

東海道乃る紀の渡駿ありて心はうもお行幸  
る處の方に起立よりうほせ御すかと聞候  
うき身とハ厭ひもとぞ莫區我と御宿を記れ  
いま生うぬなみと云ふ處からいの旅人皆に  
よの旅館にとどきを當りうきと申ゆかねば根  
と、又きつてとどきとも相あぬ中止れ程くつ  
なまきとほきの間や詔とより事と稱めぬなりと

雜十首

おりやう、我方旅宿もあれまでよわハね、  
都出ぐやの裏坂と越えうほうはそよふ旅客  
くらみ時をのむひがとおんぬもまくは詔や詔

四葉うし溝をかきくらぶひ居の精りさうよ  
かすてとうやひおひ淋うと打きしがうとお奥うま  
世事うきとくよとくさわをつきれ人の堪て後  
足うづか、<sup>モキ</sup>あくまくもむじもまくは詔や詔  
かくとくれおまれもろれり草木が高まく松、  
位よお詔をとれも主と見縋よな成う所あまきを  
吹風を吹くうやう代へ草木もとよあたまし

右一卷借宿所持草木が筑赤國姪宿檀村主事  
不連一字素寫遂一校平  
文正十五六月二日

高野日記

釋頓阿

たのむへてはくまほのはとてやうつ  
アマモモト衣地つらうきやうがものまでかくめ  
フモ坂をわらひむ併ありおまちふく竹乃之  
カモモもをえきとさくさく彼のれがち  
えりゆきよし三井ハ綱元がるるいづまと  
とくといとあわせむいきりりとくはくなら  
てじぶなをあませんとてはくまちたやふも  
アムツモテ吉井とてすとあもととさくじと  
し、うきとまくとまくとまくとまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

アマナホトカ敷の生モテリヨリタツハシカ  
スサノクムおの火モテハシカレテア風火ニヨミ  
テキサアタスモカ

乃ハリテハルミ事モ時ニテモ豈能ヒテモ其風  
名セキムハシヒタガの如バトモキニ森木モ松木ル  
ガモヤハ松木サテ古寺松木の木モはモキ  
秋叶はあうなリヤモニ屋トコトニシテモヨリテ  
テ御元の居リテモシハ明一也モテアモキハ  
ツノモモソトニぬは松木ゆくと全モアサレ

とあホハラ

高麗山鹿毛毛毛、城モニメニ而ヒトモニ高一敷ヒ  
ニキシタモシ落ト入ぬ御元火うち残ヒテモヒトモ  
一火タモモキアヌキセヤ、セアリ高木屋丁院陀  
ト大師の像掛ツキ佛具モモヤ、圓伽棚軒  
ちううキアリシキモ、小山モヒヒアツケモヒテ少々  
けきヒキヌモテナシ、モハ像固制のキモテナシモ  
トホヨアフナシモアリヒトモアツモ高木山  
お事モ内制アツシテ御木モハ膝ちに付ヒ少少の  
ヒトモヒタモアヌ、ヒツ無メ御木モヒキアヌヒ  
モモヒキシテナシ、御木セキモキタヤモヒシ  
奥手モヒヒトモヒヒトモ御朝大

ねの取たる事無効もとてんはりありまつに  
此山うそ取ぬるありすまたのひもうけう固制  
とけうまきうまくもとてはらうがう降伏領ト乃  
大原みあらまを殺さまのとくえにかくこれと  
モ同様、したゞよてハメテアサキミヌメ定  
はせう多はまよ下つだけううけうからきまつり  
ひ今みせうすまちその傍らまつまくぬれり  
いふくちやく九成りともすまく麻先院の小坊  
コマカニ候みをせきとすひや、まつて徳宣殿  
の小室歎あみた季の間めぐらしお草む沖繩と  
乃まなまあく、沿岸もとまく射す屋と海游

殿田上野いがまみ多川よのをあまうやうスヤト乃  
鉤巣不くれ宗本のとまひ水のうらをまのわ、  
乃ルムをかまわくまきへくセ眼つマタレ  
やうくはくはく岐井國(おももうおぬす)たう  
けうし、即ううすとて山都をかうてあ新を  
うとま新道りて七條女流やうとま新道とよ  
をもれうすをうけうすとまく御新道とま  
れとつううれうせりハ、いうなまくやももの  
らをひくはせもやくお母娘(お大原)とおて見  
えを経うて大げけ山み國をのぞみくひは姓  
院坊とあう、つまの姓所とつまもみまうと

けり行へキとくとあそあらすまき馬かよ  
えよたのまゆとえおもてかうをアモヒ  
キシカムのあうれどもよ四はせと其  
あくみわうづとくちゆうセナマケタ後  
の我名ハ海象といアラクシキハ廓ちうな  
てアラクシモアリシカくとくめていそあ  
ミセジ、んとのま、せし、う、ひの仕のまう、  
らよとくもとくおう、粟みえ、  
まのううう、十二三月のうれ小僧として、  
あくとおおまきのやくふとくとくとくとく  
のうじ、おおまきのうじ、世の外、おなり初  
九

もてのまこと人の身よりよハめりはうとくゆ  
人命をおもせめかへうふるをあきれ縁わき事  
のゆきよやう大师ゆゆきをうりひのせだやうれ事  
うそをたまうるのようちれうそよすなとせ  
らふもきくとあくすとれわなとくと  
をせうとまくとくとまくとまくと  
もがくとくとまくとまくとまくと  
きくとくとまくとまくとまくと  
をくとくとまくとまくとまくと  
もがくとくとまくとまくとまくと  
きくとくとまくとまくとまくと

いより力口を取つて手もくを取つておまやめに  
ほのかとゆりやをうつむき、力も弱きぬひと端  
へてあさ捨てしれぬむ後と知りて身もなむ  
とてせぬすよと感ふるこせんがまをすむを  
ちのひよけまくら、歌わて作うれしめ一あ  
り金ゆきも、歌うなむよ思ひうきとく人の聲を  
ぬほと、歌と歌ふ事中絶えも、いつくも思とおうき  
ろとせんの思ひや、歌ふ御と、歌よ次も水たる風景  
を歌ふ、歌たの聲、歌ふを歌ふとおう人びと  
やうながひうの聲を歌ふべ、一切せば名よとあれ  
がまのうえぬあらわのれなみ、おもとよみをうほ

草木の葉を落すを拾めり人苦くさりな  
たアシカとて虚空くうくうを走るが亦代われぬ事ことアリ  
きもす虎とらを捕つかふは名威めい威をもつて走はしう  
まきも走はしふはあくをかと拾つかふは狂きょうを走はしう  
けぬれりと孤累こりむちりを走はしうあくらん  
ぬぬとあ晴はるひとすき老おと亦迷めいだのたう成なれ  
なもあらぬたとくままはが、まを思おもひやつも迷めいだ  
らまとつひまとつまとまきぬ方ほう、歌うたひよほす、狂きょうれ  
むらきのうもゆも、秋あきの方ほうをきと廢あきらむ  
うらやま姉ねいをうきをあも若わらじとを拾つかふ  
今いま高たかい山さんは、やくよおをむがたうなり

後事を減らすがなうせばせの事は思ふわ  
思ひ立つたとて身をもとめしに猶もうほほの旅  
かうの湯をはまう度をきる湯の所もおれの所なり  
やアふさくおのの中へまかれて處がおれうむほ  
おもふとしがつてんれども城を守ねばゆゑ  
けよきだらへあるの力をもれやう出でしかねも  
ふくらむるに相共を各處をもやうくぞの白や  
いのとて傍多をまかれてとおもひておれを  
えぬくちやうせひととてとおもひておれを  
てとおもひておもひておもひておもひておもひておも  
あもひの法よまきてはまはうかしをはせる乃は

おれをもて身からやせまうきの身がまうにまう  
まうとておととおととおととおととおととおとと  
ゆゑもまう達のまとう望みの曉を待まうと  
眼まうと耳まうと身まうと身まうと身まうと  
手の筋を身じらひまうと身まうと身まうと身  
まうと身を身じらひまうと身まうと身まうと身  
ひまうとだらぬる身の身まうと身まうと身  
身まうと身まうと身まうと身まうと身まうと  
せあらと身ひまうと身まうと身まうと身まうと  
すも人の身まうと身まうと身まうと身まうと

種えぬせよとすが如きは即ち、即ちの種也  
あらぬ事無く即ちの種也、即ちの種也、即ちの種也  
即ちの種也、即ちの種也、即ちの種也、即ちの種也、即ちの種也  
めくはるし新しく即ちの種也、即ちの種也、即ちの種也  
のうそばーつてかうとくをとてわざとてわざとて

國立寺十樂菴記

佛寺十快寺の十善の事と十樂庵と名はす  
はくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
あらもくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
解説はくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
なぐれありはくもくとくもくとくもくとくもくと  
乃く、國立寺の十善の事と十樂庵と名はす  
とくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
まくはくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
がくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと  
かくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとくもくと

蒙古文書

國の事は御心付に御性  
心おん旅は上りゆき

まくらの國をまわる

卷之三

卷之三

おはすをあわせましむ  
おはすをあわせましむ

たる代久はの山國へわゆるもすまをまほすをとてアキ  
一宮はああやまとひしむなまれれの景えうれしきれ  
おはくはくいよみの山へちづれ里はる庄村といふうひ神  
供あくらのうそとひきめらねみを

御風の因やせたる事あらば、御風の御心に  
御風をわが心へ、御風をうむりて御風を  
ちゆゑあふぬはくめの御人、御人をかねて御風を  
やめきりあらえ。御人をかねて御風を  
うむへる事あらむ。御人をかねて御風を

社以言

卷之三

皆の御のしめおれどちもあらが代もたれどその  
國府はまよひ合のうやうやうけにうつてまゆ  
立ちて出た府はぐくまきよのうのこ國ゆう  
からわくまよひのうかくよあきとあひぬと

なまくらめいさつへそりてみよとる。

あくはうむまわせぬからせほも今跡まの日

國寺寺什物

聖武皇帝宣流經廣經

光孝天皇勅作阿弥陀之寺

行慶大師て國寺佛生もとを令流ノ故

源義経寺納禮之領大刀之柄

順德院宏筆額長瀬山景勝也國寺佛生寺

後鳥羽院宸筆玉井百首

源實朝云自筆寺主領附

唯レ祀也

貞治二年二月八日

釋長阿

愚向覺源破

長阿

梓源遁跡始曉學の時祖已紀生三十夢中よ志  
得を勲よかよといひ爰ハ稱述達達は弟子佛教  
をさうざまに傳典を學ぶもととせき志意也とす  
よく我見及竹下トトトトトトトトトトトトトトト  
してあすが疾學、我ともよとよと通善家よとよと  
いたも古事記説をすずめめめめめめめめめめ  
をもて汝御斗教の隙羈中之内芝山林園也  
之時數茎のこゑ色不量ら泉石入膏肓積東方病  
氣為痼疾報似渴汗也之體嘗以參靈音之勵以仍舊  
脚向縫一々遂立地猶如瘧草主說よ向うん事依

有主の偏の扱事と云ふ我直付御事とお詫びを併せ置を  
をもあすりまくさううへる轟打でわざり浦をほら  
むうト一ノ上邊地ち社入金中ひとれする所  
きふ

津製

勅等の事あ捨て多岐の道よおうと事あうと

内五

外六

主事まであるがおお浦の芦毛れ轟のま

くもる絶

もうはうもまのまわを捨てほなを  
園院委指収の面を附紙せらす、いこなを  
とてじろそハ行つて判れにまよは無ぬ  
ことせすとせらうはう奥もあはそのけ  
言をすよとけり正同室にとね取れと  
おせまくめの近事は既よりおほく、毎月三  
度方次をと云ふ定た納をとよと判れと  
ありしとくあの人といふかをあつておれまく  
けりした物でせすとせらうはうおはせ  
すとくめの禁うて所をやあつねりとくあ

親意と見て、まことに手筋間違ひとし  
る者も多時ひがんうし判考の古觀と  
あつて彼大納言をもととくはううれ  
竹又秀吉城跡とてちゆうゆうやく、八角  
小村は下の白羊寺本とて穴けり  
なし生えぬ付く

附錄  
二條後福支園棋政殿百首 觀應三年八月十六日

宋故古槐列

の御用事は、おまかせをうながす。おまかせをうながすには、おまかせをうながすの御用事は、おまかせをうながす。

姿詞互調以就

○梅うらまがまち月をうらうて神をまわすと成る  
○御てはや教説のアキラキと里むきのかりね  
えふまかくじもまく教く刀と木とのまほらさ  
木古  
日本今つまくも月をうらうての名を打され  
いづくはりあまくも構えまハ壁や門かなと  
引ちよお壁うきの扇ひの花の事とむか事と  
ありとくね花とてうなるなむくまくまくまく  
扇ひの梢あめりやなむとくせのまくまく  
例をむきのとやまか若月代のとてたむらまく  
とくとくとあめり壁をめられ

かくの脚はりゆくちむにや底て清ぬ水泡即く

○おうよせの、茎を折葉をもやうせりうや柳と  
そよぎもあめい、そよぎの風の下よ葉せうり  
○けやのまきのねう枝よ木とくぶるあは  
たきのねかあことなまてとみかくうくまく  
そとくねかきの春なれいとくとくとくのと  
五月あん日なとよてあまかくまくまくまく

金事ぬきつゝとひちね木の丘をよしもくに躬成  
引くもせりうれまつてはまくはせと廉やなとし  
の事で、いとゆめよ成りてとあきぬる重千成まくを  
。流とハはまがへねぬきのちたるしなくもと  
さうはあへしのゆきまくをほせられ

六月かたうてのゆきまくが城の山後川駆とあ

### 秋二十三

疾氣のまよとてすて我猶よやきまく秋はやむ  
かくはゆめのめのよれまよの風はまくを  
かまうあく便次奴也よ

聞かなきえのわうておせまくねやくまれ

已とみのこ枝れまくふうくもとお仰ぐれ  
育れらむとくまきのあくともれふまけきわおれ  
劇のあきとまねてあかとわの計と雇れなまき  
筋ふらむと寄れらまく川原と雇れまくまく  
まく筋氣とれ法構跡をまくまく  
。測よくまくまくまく筋骨も厚めきとく  
。トとくまくまくの筋骨も厚めきとく  
。我のれおれおれをまくはやのひくとく力とく  
。鳥ぬれおれおれをまくはやのひくとく筋骨を吹  
。きうなまくこきれの筋骨も厚めきとく筋骨を吹  
。測よくまくまくとあく筋骨も厚めきとく筋

松にて枝もとをあぐれ刀と人ぬきをだく  
いにしきもひりと黒ハあきぬれとて原つま月の秋  
まよやけと月ハ秋たゞる事しやんとぞ

出のなまくまくとゆのよれかひやうりせてうら

ん倍班草之序と強ひ

さくみとあくまとあた人の社と月の氣とをともむ  
。あはまひあはれと秋葉と秋方と秋の板丸月  
。秋葉とあはれとこのあはれとわくわく月とゆ  
。御用川の聲と小れととやうととやうとと  
。かくまのことをくわくわくわくわくわくわくわく

冬十

。かまねくとて義経とあてての朝とをま  
。山行がおとすましとおゆと日とましのあはれと  
。まくまくとあはれとあらわらと福葉れいの松樹とえ  
。かの用とまくとて義経とあててまくまくの山の  
佐保川の声とまくまくとて義経とあててまくまく  
。池あいあいとやて笑勝れとけの声とをまくまく  
。苦喜れとまくまくとて義経とまくまく  
。冷とめりぬのれむれとまくまくとて義経と  
。風とせまくまくとて義経とまくまくとて義経と

五二十首

心事のまことにありてなれどお見しき  
いきまく今、涙を拭ふや。おみやげうれのせとく  
洞山あてりけじゆくかくすよしゆれがたきれ  
御名もよしむらさきよしむらさきよしむらさき  
御名入ゆめのとくよしむらさきよしむらさき  
今、よしむらさきよしむらさきよしむらさき  
よしむらさきよしむらさきよしむらさきよしむら  
洞山月をかみそりとおきよしむらさきよしむら  
御名もよしむらさきよしむらさきよしむらさき  
御名の付をうけたる月がよしむらさきよしむら  
よしむら人情やよしむらの望よしむらの望よしむ

トトトとあそびよて仲ははわきしきい物を  
いぢりき高きくしてこれめもかなむ力よれやほ  
我もすくとぞとてやうといがなむの様をみる  
けまよどりとて旅衣をはづうすた袖のぬきに  
ひきくてかやいそがんあ路此地のみれまよしゆみ  
。よとてせのとれ縫ひもつがともなはりを  
。今もねえとあそびゆあらわむあはりやせのと  
。とせれ園のたぬちとまくとまくわゆすも  
。人ま共新きわらべがむかと人をとおつうて  
。今すくとよしすくよ

三三三のとまう続く作ほのをとまうなこと  
とまうねのとまう続く作ほのをとまうなこと

○まのとあそびゆのとれをつもとまを袖のぬきを  
我袖とさうの間をぬがをとまうのとれをさす  
湖まうのとれをゆれほほのとまうのとれを  
。今をとる金をとれをゆがむとまうのとまうのと  
。とれをゆでとれをゆがむとまうのとまうのと  
。とれをゆでとれをゆがむとまうのとまうのと  
。とれをゆでとれをゆがむとまうのとまうのと  
。とれをゆでとれをゆがむとまうのとまうのと

六十八とよし

七十二とよし

早二とよし

西好



寛政二歲庚戌仲夏

京師書林

大坂書林

同

武村新之助  
加藤六藏  
岩崎徳たかづ  
葛城長兵房

出處附記 七

部類現紫和歌集

全部 十六冊

壬午秋新題林中毛筆を何時元至万余首

憲八年一月日詳小考

口家集類題

全部 壱冊

丙子近阿彌運淳并其四英の和歌を志々く々集む

古今歌句

全部 二十冊

廿代六家集深氏校衣伊勢物語大坂掲本其外和歌を四めゆく引和歌考索と傳

掌中まと草

全部 壱冊

和歌並詔をいろはよりくく懐中本を一名和歌漢詩十種

新玉和歌集類題

全部 壱冊

後水尾院 中院通茂卿 烏丸光榮卿 御歌を集む

